発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町２
電話(53)３０３３番
(53)３０３４
編集兼発行人　前川哲也
半年間1,200円　送料共

くり返される重大災害

裁判公判日程

大災害裁判公判　五月十六日午前十時から福岡地裁で。原告の証言を終り、いよいよ会社側弁護士による反対尋問へ。

九・二八　坑内火災裁判公判　五月二十一日午後一時十分から福岡地裁で。吉田曙病院長に対する、会社側弁護士による反対尋問予定。

上村裁判　裁判所の和解勧告にもとづき、現在話し合い進行中。

ことし三人めの死者

計画上回る出炭のなかで

重大災害が続発し続ける三池炭鉱が、このほど今年三度めの死亡災害をひき起こした。会社自らおこなっている〝保安強調月間〟運動中のことゝて、とくに注目されているが、市内の新聞にさえ「……計画を上まわる出炭」状況が伝えられる折だけに、激しくその保安責任が問われている。果たして続発する重大災害の原因はどこにあるのか。（三面記事参照のこと）

災害は四月四日、三川鉱（**平賀哲陽鉱長**）で起きた。そのため払採炭員の大城順一さん（三十一歳。荒尾市原万田社宅二棟）が死亡。先に、有明鉱で連続発生した災害のために犠牲となった二人（安達幸好さんと飯田富司夫さん）についで、ことし三人めの悲劇だ。

会社が「二度と災害はくり返しません」と、固い決意で誓ったはずのあの三池大爆発（四百五十八人の死者を出す）以後だけで、なんと百二十二人もの犠牲者を出したことになる。

落盤の下敷に

さて、災害が起きたのは四日の午前六時三十分ごろだった。三川鉱上層七十卸西四片払で落盤が発生。大城さんはその下敷となったのである。

その日大城さんは、四人で動枠（鉄製で、払の天盤をささえるもの）の撤去作業に配役され、動枠を撤去した跡の、天井維持のための立柱作業にかかる準備中、突然の落盤に罹災したもので、即死だった。

大城さんらは、前夜三番方に出勤したが、ひき続き残業しながら作業をおこなっていた。そのとき保安責任者どころか罹災状況を目撃した者もいなかったところからもわかるように、人手が足りないため、大城さんはいきおいたった一人の作業を余儀なくされていたのである。

定時内作業という正常な労働でなら、動枠回収は日に三セットで終る。が、出炭督励に気を奪われている鉱は、ほとんど四セットずつ回収させるために、疲れたからだに、さらに残業労働を押しつけることが日常化している。このような会社の仕うちが、大城さんを死にまで追いやったもので、会社の責任は重く、のがれることはできない。

三池労組は、ストライキをもって抗議した。

有明新報　昭和55年4月10日（木曜日）　第9677号（日刊）
発行所 株式会社有明新報社
渡辺産婦人科
昨年度の三池炭鉱
出炭計画上回る
貯炭のヤマも減少へ
減少する貯炭のヤマ
三池炭消費が目的
三池火力発電所 きのう設立披露
退職協定交渉を再開
きょう当局の出方に注目
当初予算と重点施策〔2〕
公共事業抑制で縮…
明治町ポンプ場の…
県年金協総会開く
荒尾市を会場に 手数料改定で討議

おどろくべき、三池炭鉱の石炭の大増産ぶりを伝えた〝有明新報〟の記事。それほど好調のなかで次つぎに出る尊い犠牲者。

遺族の今後はどうなる？

三川鉱の災害（落盤）に命を奪われた大城順一さんは、三池合板の工場閉鎖にともない、昭和五十一年の七月十九日に入社、三川鉱に払採炭員として働くようになった人。としもまだ若く、三十一歳で、住居の荒尾市原万田社宅二棟には、突然の不幸にうちひしがれた遺族が残された。

妻のトシ子さんが二十九歳で、二人の間に三歳の長女の真弓ちゃんに、生後わずか数カ月という赤ちゃんの、次女＝雅代ちゃんがある。

故人は入社後まだ五年にならぬから、頼む退職金もないうえに、聞けば妻のトシ子さんは早く両親に死別したとかで、相談相手の身内の人もいないとのこと。これから果たして、二人の遺児を抱えてどう生きていくか、心を痛めずにはいられない。

炭労春闘、いよいよヤマ場

近づく実力行使の機

全炭鉱労働者の期待結集

炭労の春闘は、早くもヤマ場にさしかかった。十七日、石炭政策要求にもとずく中央行動が取り組まれ、すべての炭鉱労働者の期待がかかっている実力行使のときも近い。

石炭政策にもとづく要求と、さらに一万四百七十円という賃上げほかの春闘諸要求を掲げて闘っている炭労の闘いは、早くもヤマ場にさしかかった。近く実力行使の段階に突入することは、ことしも避けられないだろう。日ごとに物価が上昇しているだけに、今後の生活を思えばこの機こそ、新労組員と固く手を取り合うことが第一で、何よりそのための、全組合員一人ひとりの努力がのぞまれる。

春闘必ず闘い抜く

大牟田地区で決起集会

大牟田地区春闘共闘が主催する〝物価値上げ反対・八〇春闘大牟田地区決起集会〟は、四月十四日大牟田労働福祉会館で約六百人の労働者が結集して開かれ、いよいよヤマ場を迎えた春闘を、賃上げなどの要求を獲得するため、力いっぱい闘うことを誓い合った。

そのなかで発言にたった労働者は、「全交通運輸労働者の中核となって闘い抜く」（国鉄労組代表）、「中小労働者として、あくまで未組織労働者の関心を結集しながらねばり強く闘う」（全国一般労組代表）——などのことを誓ったが、さらに参加の婦人組織代表は、とくに「物価値上げに反対し闘う」決意を述べた。

春闘はすでに妥結したところも見られ、平均ほぼ一万七千円くらいと見られている。それでも、物価上昇の足どりにはとうていおよばない。

おわび

余儀ない事情のため、本号に〝原告団レポート〟を掲載することが不可能となりました。次号からは通常通り掲載できるよう、鋭意努力しています。お許しくださるようにお願いいたします。
——編集部

「笑顔」はたれのか

〝有明新報〟記事は語る

▼…〝有明新聞〟は四月十日の一面トップで、三井三池鉱業所がまとめたという、五十四年度の出炭実績について注目すべき事実を伝えた。まず、次にその要約を—

×

それによると上期（五十四年度四月—九月の間）〈出炭実績〉は二百三十二万八千トンで、計画を十七万二千トン下まわった。しかし、下期は二百七十一万トンで二十一万七千トンも上まわり、年産計画の五百万トンを四万五千トンも上まわった。

三池鉱業所は……国内炭二千万トン体制の中で四分の一をしめている。前年度までは五百二十万トンの計画をもっていたが、鉄鋼不振などで五百万トン体制にダウンした。上期は不調だったが、下期には新しい払いが完成するなど、好調出炭が続き、出炭計画を大幅に上まわったもの。

一方、二百万トン近くになっていた貯炭のヤマも、セメント業界が石油から石炭に燃料転換を急いだこともあって減少しだしている。とくに石油三十ドル時代をむかえ、燃料炭が見直されており、海外炭との格差が縮まり……貯炭のヤマに炭鉱マンにも笑顔がもどりつつある。

×

▼…以上の記事に、本紙前号の「貯炭崩して放出せよ」との日経新聞の報道を伝えた記事、さらには三井資本の、石炭を求めての積極的な海外進出を加味して見ると、真実があざやかに浮びあがってきはしないか。果たして「笑顔」はたれのものだろう？